

## 二〇二三年の研究会の活動報告

「大岡信研究会」会長 西川敏晴

### 放心 文理融合 地域国際芸術祭 いつも夢にみる女

コロナ禍の鎮静化に伴い、今年は全三回の研究会をリアルな会場とズームオンラインとの両方で開催しました。新たな会場は、渋谷区代官山のクラブ・ヒルサイド・サロンです。会場で講演者の声を直接聴き、講演者が客席と会話を交わすことが大事であることを改めて実感しました。また、遠方の方々に参加していただくために、引き続きズームによる講演を視聴できる方式を続けていきます。

2

一月の研究会は、詩人の吉増剛造さんにお越しいただきました。吉増さんは二〇二二年の暮れに、ドキュメンタリー映画『眩暈 VERTIGO』が上映され、毎日トークイベントで大忙しでしたが、年が明けた途端、「毎日、大岡さんの本を読んでいます。手元がないこれとあの本貸してください」と度々連絡があります。

講演の十日ほど前からは、評論や詩を読みながら、大岡の揺らぎや生動とリンクしながら日誌のように、講演で語るための大岡信論が書き進められて行きました。カラフルに彩られた「裸のメモ」として、講演当日に公開され、それを詩人自身が朗読。メモの手書き文字と色彩、詩人の声も含めて、立体的な大岡信論が出現しました。さらにその後、五月の足利市の「アートプレイス&カフェ」でのイベントで、十二分間の映像による「大岡信論」を発表し、完結に至りました。

五月例会の講師は、西垣通さん。人類とコンピュータの関係を、文理融合の立ち位置から縦横に語る西垣さんが、どのように創られて行ったか、という物語が前半です。会社員から大学教授になり、研究を深めていくプロセスを時代の流れを解説しつつ語られる内容に引き込まれました。随所に大岡信の『肉眼の思想』が引用されて、その原点が一九八七年に創刊された詩誌「花神」（花神社）に於ける大岡×西垣対談であることも確認できました。また、最初の留学先が、スタンフォード大学でコンピュータの先端技術を学び、二度目の留学先が、当時フランス現代思想が盛り上がり上がっていたので、ランス大学へ留学したという経緯は、西垣さんならではの。最後に、今話題の「対話型の生成AI」の話題になり、「AIで俳句を作る」というシンポジウムが京都大学で開催されたエピソードを伺いました。その瞬間、終戦直後に大きな話題になった、第二芸術論や短詩型に関する論争と重なるのではないか、と思いました。

3

研究会九月の講師は、北川フラムさん。越後妻有の「大地の芸術祭」を始め、各地にて地域型国際芸術祭を企画、運営をされています。当日も「奥能登国際芸術祭」の準備から戻られた忙しさの中の講演でした。様々な活動や仕事の場面で、大岡信の『うたげと孤心』が引き出され、その精神に北川さんご自身が支えられていることが語られました。講演の中で、「大岡さんの対談、鼎談はバランスに優れ、大岡のよく聞く姿勢と対話から弁証法的に話が進む」という指摘に思わず膝を打ちました。大岡さんの対談集は、何冊かありますが、その多くは雑誌掲載のままになっています。大岡信の対談の全体的な収集整理は、今後のテーマの一つとも考えられます。

「大岡信の詩」についての研究会からの依頼に、藤井貞和さんは、「私としては、「いつも夢にみる女」を選びたい」と宣言され、満を持して論じてくださいました。「彼女の薫る肉体」と「いつも夢にみる女」と二つの詩を引用しながら、「いつも夢にみる女」は前者の続編で、「生と死をうたう」と捉えて論が展開されています。「彼女の薫る肉体」は、長編の詩のために、全文を掲載することはなかなか難しく、それ故に語られる機会が少いという事情も見えてきました。今回の機会に、「彼女の薫る肉体」全文を掲載することにしました。大岡信の長い詩を読む機会であり、藤井さんの詩論を深く理解していただく一助になればと思います。

第四回大岡信賞（明治大学・朝日新聞社共催）は、詩人の野村喜和夫さんが受賞されました。「詩集『美しい人生』（港の人）における光と音の魅力が際立つ円熟した成果、および長年にわたり現代詩を牽引してきた創造活動に対して」が受賞理由です。「しずおか連詩」も大岡信の遺志を継いで、イベントを担っておられます。成果として、二〇〇五年―二〇二二年までの連詩の集成を『言葉の収穫祭 しずおか連詩』（野村喜和夫編）として一冊にまとめ、左右社から刊行しました。

十

発掘されたテープ（録音）の加藤楸邨×大岡信の三回目の対談は、「楸邨の代表句集『野哭』を読み解く」と題して、構成、解説を付けて雑誌「きこい」十五号（季語と歳時記の会刊）にて発表しました。

大岡信研究会はいよいよ十年目の活動に入ります。引き続きご支援をお願いいたします。